

口永良部島

概 況

2日から身体に感じない火山性地震が多発し、火山活動は活発な状態でした。その後も火山性地震は消長を繰り返しながらも多い状態で推移しました。また、振幅の大きい火山性微動も発生しました。

上空からの観測及び機動観測では、新岳・古岳の噴気活動や地熱地帯の状況等に特に異常な変化はありませんでした。

地震・微動活動の状況

火山性地震は、1日12時頃からやや多くなり、2日の70回を最高に2月は315回発生しました。A型地震の発生回数は1日あたり1～51回で月回数206回(1月：94回)、B型地震は1日あたり0～19回で月回数109回(1月：70回)でした(図1)。

火山性微動は1日0～7回で月回数48回(1月：2回)でした(図2)。

噴気活動及び地熱地帯の状況

鹿児島県、海上自衛隊鹿屋航空基地救難飛行隊及び九州地方整備局の協力を得て行った上空からの観測(図4、図5)と機動観測(図6)では、新岳及び古岳の噴気活動と地熱地帯の状況等に特に異常な変化はありませんでした。

地殻変動活動の状況

GPSによる地殻変動観測では、火山活動に起因する変化はありません(図7)。

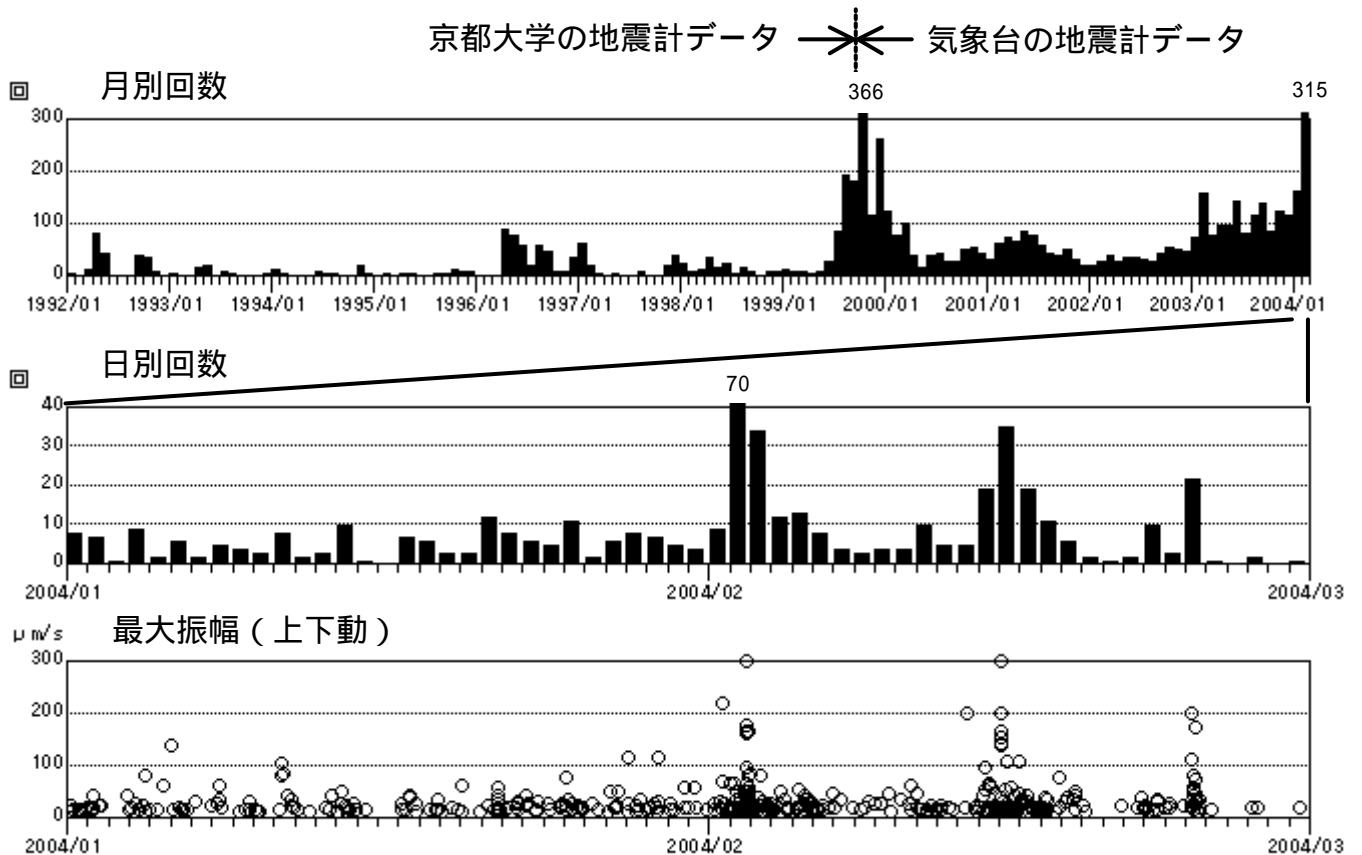


図1 火山性地震活動経過図(1992年1月1日～2004年2月29日)

(1999年9月12日までは、京都大学が口永良部島観測点の地震計で計数したデータを利用)

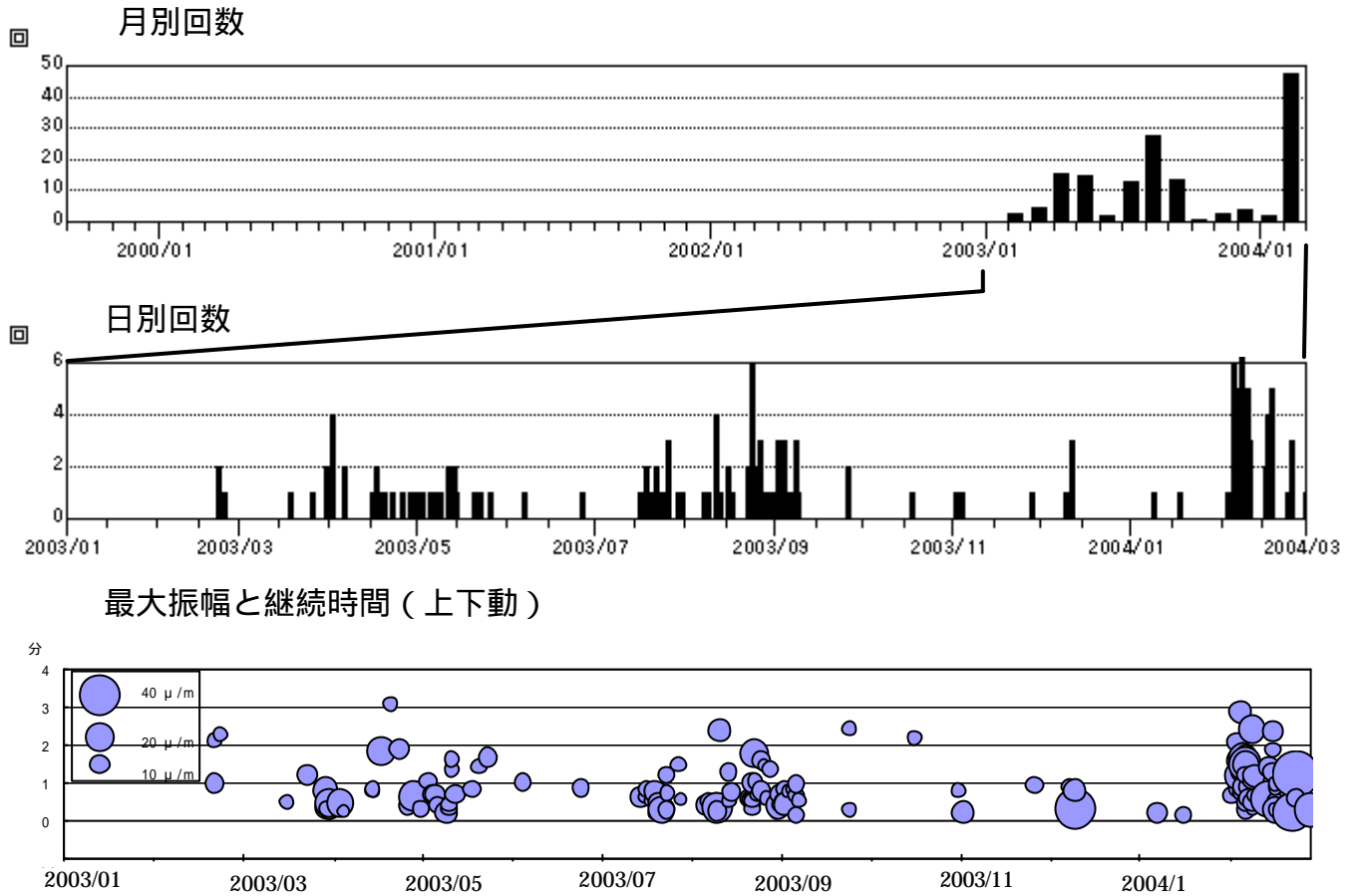


図2 火山性微動活動経過図(1999年9月13日~2004年2月29日)

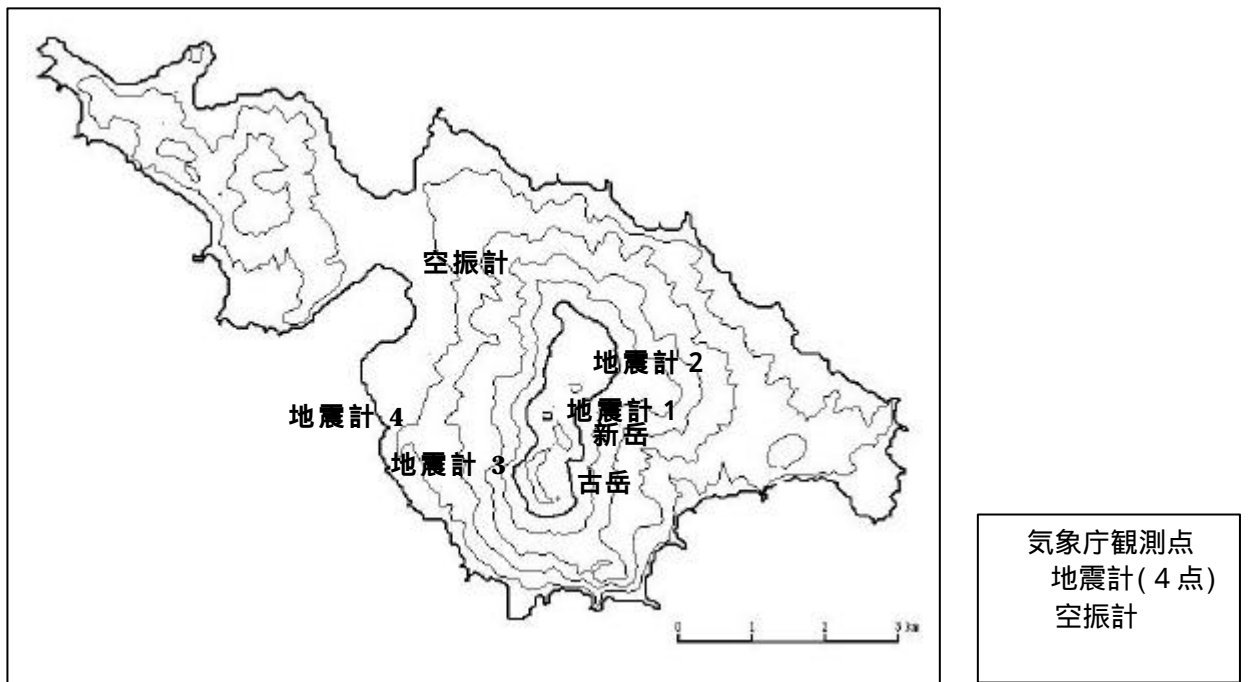


図3 観測点位置図



南東方向から撮影した古岳火口底
(2003年11月26日撮影)



西方向から撮影した古岳火口底
(2004年2月3日撮影)



東方向から撮影した古岳の火口底
(2004年2月16日撮影)



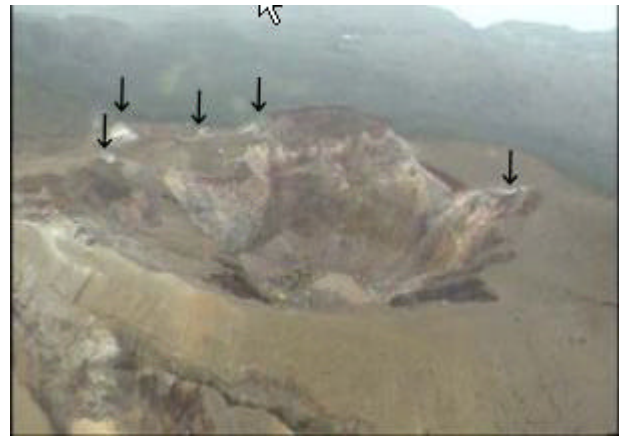
東側から古岳火口を撮影
(2004年2月26日撮影)

図4 古岳火口の噴気活動(上空からの観測)

古岳火口の噴気活動は、気象条件の違いによると思われる噴気量の違いが多少あるものの、2003年11月26日に実施した観測と比べて、2月の観測に、特に大きな変化は見られなかった。(は主な噴気箇所)



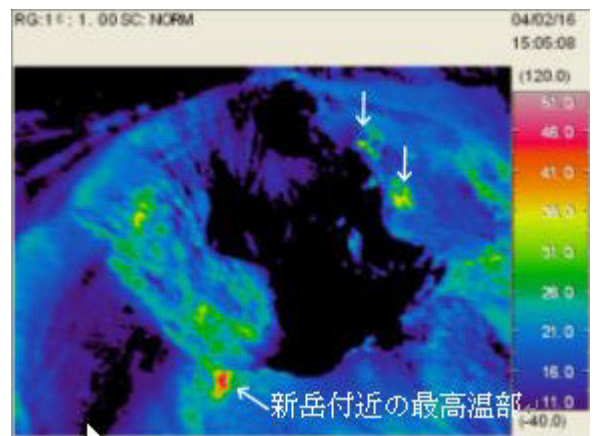
北東方向から撮影した新岳火口
(2003年11月26日撮影)



北東方向から撮影した新岳火口
(2004年2月3日撮影)



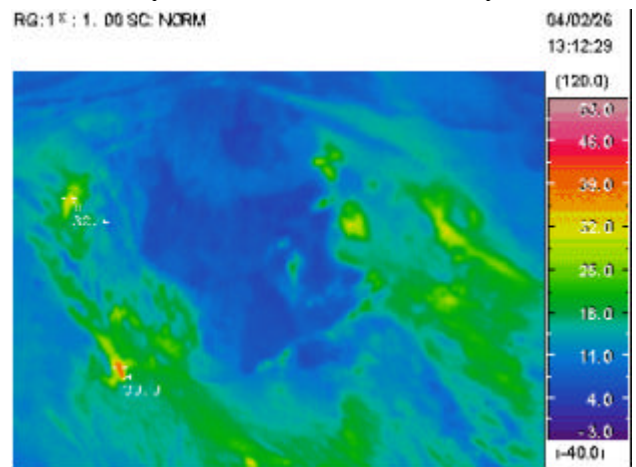
西方向から撮影した新岳火口
(2004年2月16日撮影)



北西方向から撮影した新岳火口の熱分布
(2004年2月16日撮影)



北北西側より新岳火口を撮影



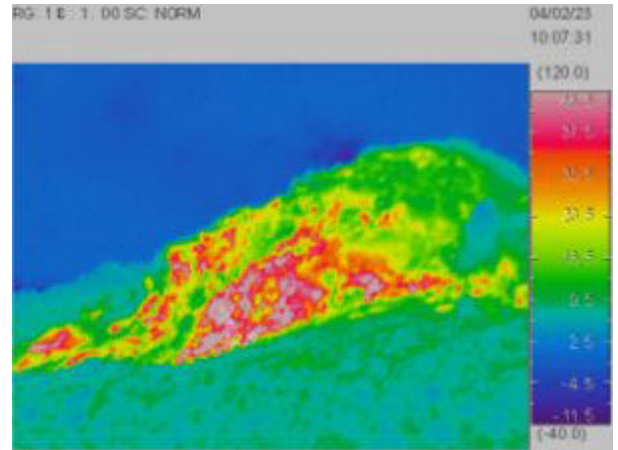
北北西側より新岳火口の熱映像

図5 新岳火口の噴気活動(上空からの観測)

新岳火口の噴気活動は、2003年11月26日に実施した観測と比べて、2月の観測に、特に、大きな変化は見られなかった。また、火口内の噴気も目立ったものはなかった。()は主な噴気箇所)



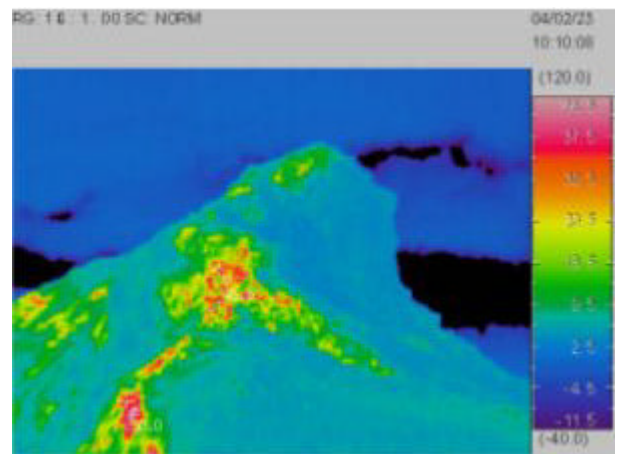
新岳火口西側から北側噴気地帯を撮影



新岳火口西側から撮影した北側の熱分布



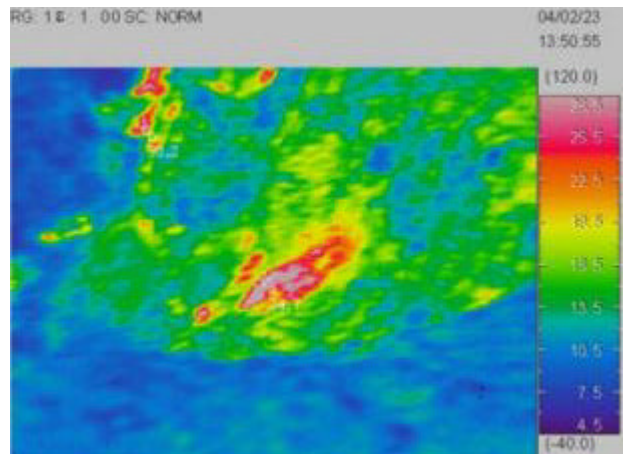
新岳火口西側から南側噴気地帯を撮影



新岳火口西側から撮影した南側の熱分布



新岳火口東側から北側噴気地帯を撮影

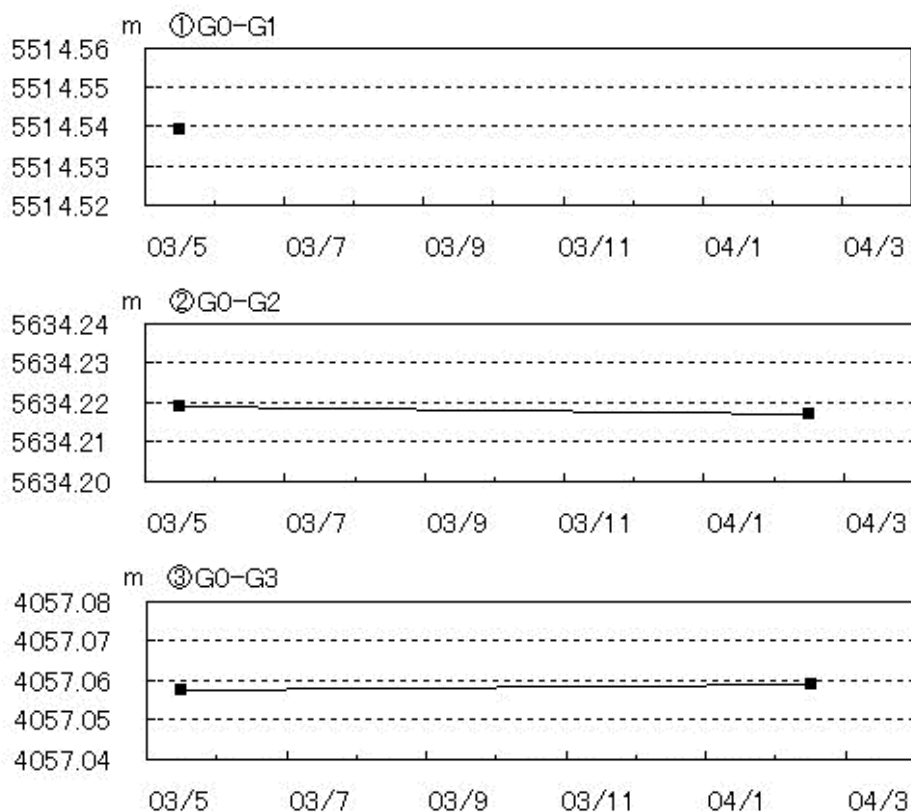


新岳火口東側から撮影した北側の熱分布

図6 新岳火口の噴気、熱分布の状態(機動観測、2004年2月23日撮影)

2003年5月12日の観測時と比較を行なった結果、噴気・熱分布の状態に変化はなかった。

GPS 繰り返し観測結果



GPS 観測点位置図

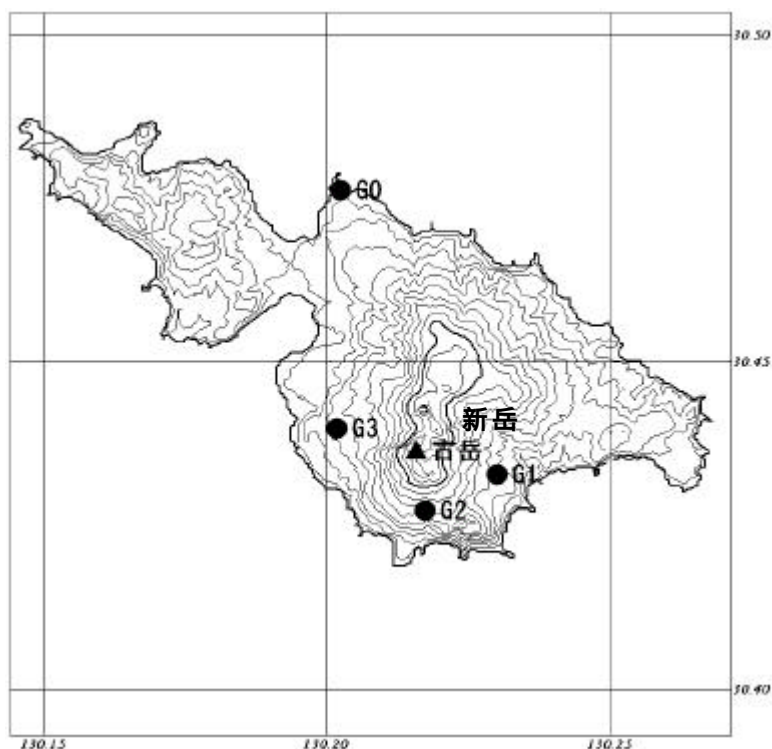


図 7 GPS による地殻変動観測

2003 年 5 月と今回(2004 年 2 月)の GPS 繰り返し観測の基線長には、火山活動に起因する変化は見られなかった。(G1 観測点消失により観測不能となる)